

# Bookstart Newsletter



2022  
秋  
No.78

ブックスタート・ニュースレター



佐賀県伊万里市

特集

## 未来への投資

～ 市民の応援が事業継続のエネルギーに ～

ブックスタートで赤ちゃんを保護者に手渡されるブックスタートパック。

自治体によってその内容（絵本のタイトル、冊数、一緒に手渡すアイテムなど）はさまざまで、絵本1冊のみという地域もあれば、絵本3冊に加えアドバイスブックレットと布製バッグを手渡している地域もあります。パックの内容により費用は異なりますが（\*）、比較的低額な予算で実施できる事業です。

しかし、地域経済の停滞や少子高齢化による税収減、社会保障費の増加、新型コロナウイルス感染症対策のための支出など、厳しさを増す自治体の財政状況において、事業予算の確保は大きな課題となっています。

こうした状況のもと、ブックスタート事業の重要さは理解されつつも、予算確保が難しくなった時、どうすれば事態を打開できるのでしょうか？

市民の応援で事業を継続している佐賀県伊万里市の事例をご紹介します。

\*ブックスタート事業に関するアンケート調査（2019年）によると、対象者一人あたりのパック費用は300円台～2,500円以上と自治体によって異なり、平均値は1,288.4円（n=93）。

## ケーススタディ 佐賀県伊万里市

今回取材に伺ったのは、伊万里市民図書館。「まちに新図書館を」という市民活動をきっかけに生まれ、1995年の開館時には、約200名の市民や学生が、本を運んだり本棚に並べる作業を手伝いました。現在もイベントの企画運営、書庫の整理、庭木の手入れなどさまざまな場面で市民が活躍。その名の通り「市民」の図書館として存在しています。



館内の様子。伊万里焼の釉薬の原料となる木（イスノキ）が、一般向け書架と児童コーナーを区切っています

## 人生のスタートに立ち会える幸せ

ブックスタートも市民の声がきっかけとなって始まりました。

「私が所属するボランティアグループは、それまで園児以上を対象

におはなし会をしていました。でも、

これからは赤ちゃんも対象にしたいと当時の図書館長に相談したところ、ブックスタートのことを教えてくれたんです。そこで、NPOブックスタートの方々による講演会を開催し、まずは活動について学びました（ボランティア・持永由美子さん）。

その後、実施に向けて市民、図書館、その他関係部署での話し合いを重ね、検討開始から2年後の2004年、図書館主管の官民協働事業としてブックスタートを開始しました。

「3か月児健診、おめでとうございませう」。ブックスタート会場で親子に直面したボランティアは、まずこの言葉をかけます。「始めたばかりの頃、ここで育てるのは大変でしたよねと声をかけると、中には涙ぐむ方がいらつしやいました。必死で子育てをしているのに、まわりからは育てて当たり前と言われてしまう。だから、頑張りましたねという気持ちで接しています」（ボランティア・北川香栄さん）。

「僕が読んだら泣かんですかね」と心配する父親を「お父さんの声もいいものよ」と力づけたり、「大変ですね」といった言葉を多くかけられてきたであろうダウン症の赤ちゃんを抱いた保護者には、あえてそうした言葉は使わ



立ち上げ時から活動しているボランティアの持永さん(左)と北川さん(右)。「赤ちゃんと保護者が絵本で笑顔になる姿を見ると、幸せな気持ちになります」

ず他の赤ちゃんと同じように対応するなど、親子一組一組に寄り添ってブックスタートを実施してきたそうです。

「赤ちゃんの笑顔は未来につながるものです。ブックスタートは、言葉とともに赤ちゃんと保護者に絵本を手渡すほんの一瞬のことで、とても小さなことかもしれませんが、伊万里に生まれてきてくれた赤ちゃんとの出会いでもあるのです。その子の人生のスタートに少しでも自分が関わっていられるのは、とても嬉しいことです」（持永さん）。

## 事業を継続するために 変化を起す

ボランティアと協働し丁寧に事業を実施してきた伊万里市ですが、予算確保は当初から大きな課題でした。

市の財政状況を考えると予算を安定的に確保していくことは難しく、ボランティアの発案で、市民に香典返し費用の一部を寄付してもらう「いのちのボタンタッチ」という体制を作り出した。故人の家族から、未来ある赤ちゃんのために贈られた寄付金は、市の「教育振興奨励基金」の一部として積み立てられ、そこから予算に充当する形でブックスタートを実施してきました。しかし、新たな課題として寄付金の減少傾向が続いていたところにコロナ禍が拡大。3か月児の集団健診が中止となり、ブックスタートも一時休止せざるを得ない状況になってしまったのです。

「このままでは事業が廃れてしまう。感染対策費用も含めた予算を確保し、今できる方法で事業を再開するには、何か変化を起こさなければいけない」と危機感を覚えた図書館は、これまで以上に官民協働を進めることでこの状況を乗り越えようと、「ふるさと納税制度を利用したガバメントクラウドファンディング」（以下、クラウドファンディング）の実施を決意しました。

とはいえ、一部署の判断で行えることではありません。図書館では、それまでも機会があるごとにブックスタート事業の意義を行政内で伝えていま

した。その素地をもとに、市長からの後押しも得て取り組みを開始しました。



伊万里市ではブックスタートを「家族のコミュニケーションの扉を開く」事業と捉えています

### 財産となった市民の応援

ふるさと納税は、返礼品や節税を目的とした寄付が大半を占めると言われている上、支援者が寄付したい分野を指定できても、個別の事業までは指定できないことも多く、自治体側でも使い道に悩み資金を活用しきれないケースがあるといえます。一方、クラウドファンディングは自分が応援したいプロジェクトを指定して寄付するため、ブックスタートに共感してもらうための広報活動が、成功への大きな鍵となります。募集告知で何を訴求するのか、そのためには誰にどのようなコメントをお願いすればいいのか、

写真はどうするのか。図書館は、財政課ふるさと応援係とともに具体的な検討を進めていきました。

また、目標額達成には返礼品などを動機とした自治体外在住者よりも、そこに暮らす人々の寄付が大きく影響するといえます。ふるさと応援係から、身近な人いかにアピールしていくのが大事とのアドバイスを受けた図書館では、チラシを配ったりクチコミを利用するなど、市民との関係性を活かし、できる限りのPR活動も行いました。

そうした努力が実り、ブックスタートのクラウドファンディングは、2021年2月から3か月間で目標額の100万円を上回る約120万円、82人の寄付を集めました。

「お礼状を出すために寄付者のリストを見たら、ほとんどが返礼品の伊万里牛をもらう権利のない市内在住の方だったんです。改めて、身近な人が応援してくれたからこそ達成できたんだなと思いました。中にはこれまでもブックスタートを知らなかったという方もいらっしゃいました」（図書館・末次健太郎さん）。

「金額が集まったことだけでなく、たくさんの人にブックスタートを応援しようという気持ちになってもらえた

ことが、結果的に大きな財産となりました」（図書館・小柳良子さん）。

### 市民から託された未来への投資

市の予算で事業費を確保できないに越したことはないかもしれませんが、しかし、それが困難になった時、伊万里市が選択したのはクラウドファンディングでした。市民からブックスタートを応援する思いとともに、「未来への投資」を受け取ることができたのです。

「行政の事業は税金で実施されるものですが、その税金に気持ちがいっぱいされたのがクラウドファンディングだっただけです。直接活動に携われなくても、伊万里市に生まれ育っていく

赤ちゃんを寄付という形で見守っています。次世代を担う子どもたちに、市民の方々が気持ちを届けたのが今回の取り組みだったと言えるのではないのでしょうか。それは新たな形でのブックスタートへの市民参画であり、市民から託された「未来への投資」を形にしていくのが、私たち職員に与えられた使命だと考えています」（末次さん）。

コロナ禍によって中止となった集団健診は、再開の見込みが立たず、現在は図書館でブックスタートを実施しています。参加率の向上やボランティアの活動再開など、課題はあるのですが、市民の応援と行政の熱意がこの困難を克服する大きな力となるでしょう。

#### 他の自治体では

#### 事業存続の危機を市民が救う

● 2005年の市町村合併に伴い、旧厳木町で実施していたブックスタートが終了。町内からの終了を惜しむ声を受け、ボランティアが婦人会に協力を依頼。リサイクル活動での収益で絵本を購入し、事業が再開できることとなりました。そして、2009年から全市でブックスタートが開始しました。（佐賀県唐津市）

● 活用していた県の補助金が終了し事業が一時中断。健診会場での読みきかせを続けていたボランティアから、絵本を親子に手渡したいと強い要望があり、市の予算で再開することに。（高知県南国市）

『ブックスタートの20年』  
(NPOブックスタート編/2022年)  
他にもさまざまな事例を紹介しています▶



ブックスタート会場でのひとコマをご紹介します！

# ほっと PHOTO

\*写真はすべて各自治体より提供。  
\*この他にも、ブックスタートにまつわるさまざまな話題を当 NPO ウェブサイト「読みもの」で紹介しています。



## 大分県日出町



▲赤ちゃんの手形・足形で世界にひとつの巾着づくり。ブックスタートでのコラボ企画として、図書館と子育て支援施設が連携し行いました。

## 徳島県徳島市



～梅雨は花菖蒲～

～夏はひまわり～



～秋はお月見～



▲読みきかせに用いるアクリル板に季節にあわせた飾り付け。

## 群馬県長野原町



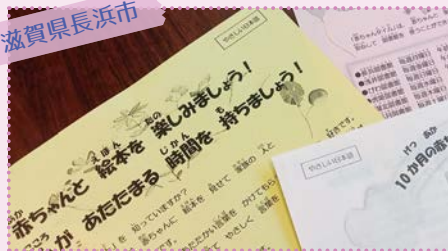
▲4月から事業開始。読み手にジューっと熱い視線を送る赤ちゃん。そんな赤ちゃんをお母さんは愛おしそうに見つめます。

## 埼玉県飯能市



▲9月から事業開始。健診会場では、早速絵本を楽しむ親子の姿が見られました。

## 滋賀県長浜市



▲英語・ポルトガル語・スペイン語のほか「やさしい日本語」の資料を作成。保護者に好評です。

## ことのは

NPO ブックスタートのスタッフが出合った言葉

あなたの子は、あなたの子ではありません。  
自らを保つこと、それが生命の願望。そこから生まれた息子や娘、それがあなたの子なのです。  
(中略) あなたは弓です。その弓から、子は生きた矢となって放たれて行きます。

『預言者』(カール・ジブラン著 佐久間 彪訳 至光社) より「子供について」

まもなく親になろうとする頃に見かけたこの文章は衝撃的でした。子どもは所有物ではないと、叱られたように感じたのです。

でも後半で親は子を放つ弓だと書かれており、親への励ましでもあると捉え直しました。矢となって飛び出していく子どもたちを見守ることが、弓である親の役割なのでしょう。

百年以上前に書かれたレバノンの詩人の言葉は今でも、現代の私たちを温かく照らしているようです。

## Information

### 全国研修会 2022 [オンライン]

日時:

11月29日(火) 13:30～16:00

- ① 講演「絵本は親子のゆりかご」  
伊藤明美さん(保育園図書館顧問・司書)
- ② 報告 NPOブックスタート
- ③ 事例発表  
・宮城県多賀城市  
・兵庫県川西市
- ④ トークセッション

▼詳細はこちらへ

